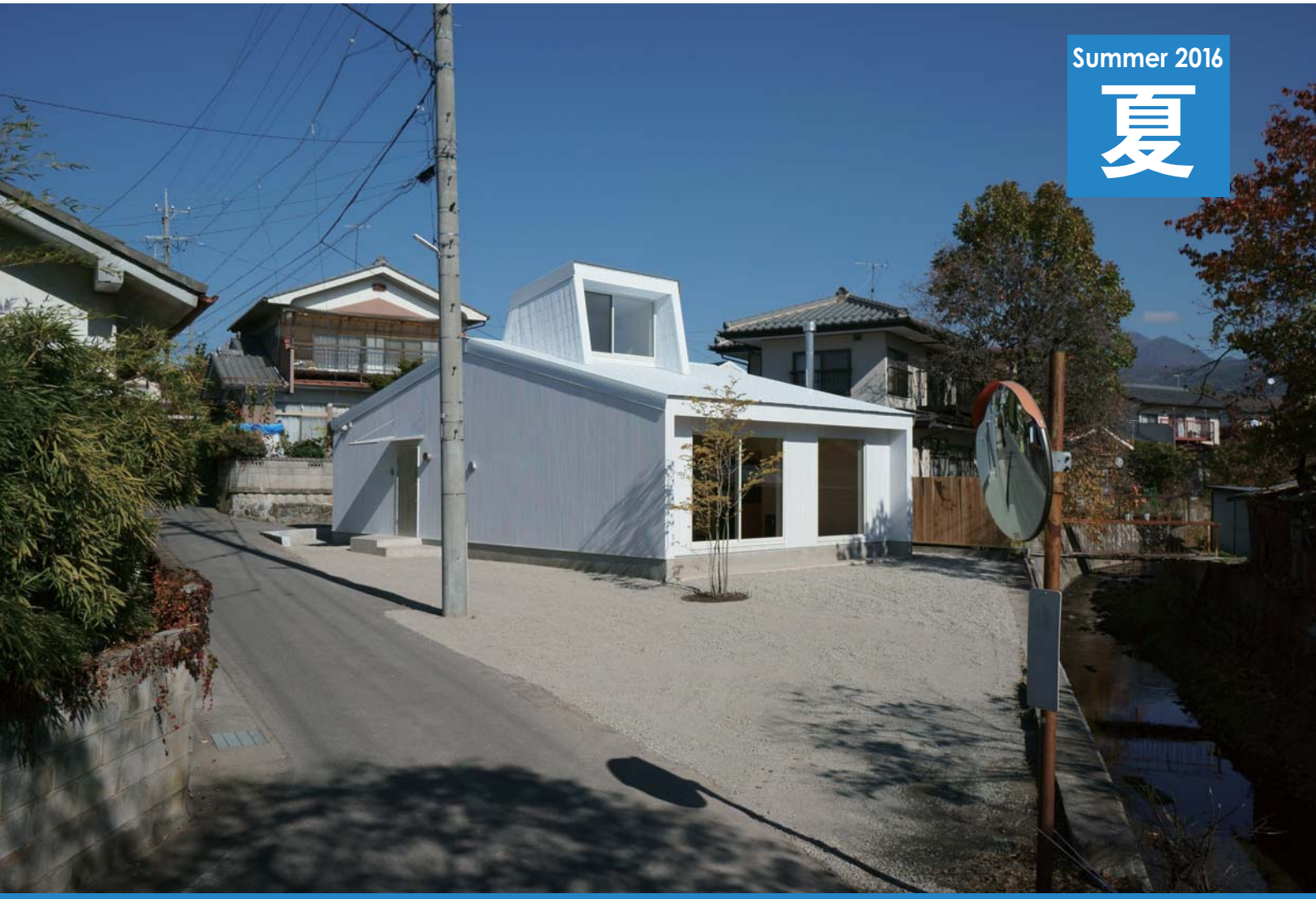
ファインスチール　第60巻　3号　通巻580号　1、4、7、10月25日発行　平成28年7月25日発行　ISSN1348−494X

ファインスチール

Fine Steel



Summer 2016
夏

CONTENTS

01 特集1
第14回 金属サイディング
施工例写真コンテスト

05 特集2
第68回
全国建築板金業者 京都大会

07 ファインスチールを使った 建築設計例 318
ペッタンコハウス
地域・風景になじむ、愛でられる建築 ———
設計：田辺 雄之／田辺雄之建築設計事務所

11 建築めぐり
ウォートルス伝 5　丸山雅子

13 街でみかけるファインスチールの施工例　その27

一般社団法人 日本鉄鋼連盟

特集 1

第14回　金属サイディング

施工例写真コンテスト

（主催：日本金属サイディング工業会　後援：一般社団法人 日本鉄鋼連盟）

日本金属サイディング工業会が一般社団法人 日本鉄鋼連盟の後援により、平成27年７月１日～10月31日に実施した「第14回金属サイディング施工例写真コンテスト」について、ご応募いただいた施工例の写真を中心にご紹介します。

遠藤 恒明 さん

この家は私たち家族の住まいとして建てたもので、大山を望む斜面地に私たちの思いを詰め込んで形にしたものです。外観は斜面からせり出したような軽快感・浮遊感のある形に安定感のある切妻の屋根を組み合わせました。妻面・主階部分・基壇部分で外装材を張り分け、主階部分に金属サイディングを張りました。情趣感からこの部分に木の縦張りも考えられるところでしたが、耐久性・耐候性・防かび性などの性能面やサッシュとの相性などのデザイン面も考慮して、金属サイディングを採用しました。

新築部門 **最優秀賞**

フォルム設計工房（鳥取県）

●江口特別審査委員のコメント

本年度は優秀な作品が目白押しでした。金属サイディングの扱いに慣れた工務店、デザイン性の高さ、カラーの豊富さを熟知した設計士が、日本全国に登場しています。そんな中でもこちらの作品は、デザインがシンプルで目を惹きました。黒のサイディング外壁と、木のテラスの横ライン、スパンよく並んだ縦の柱。シンプルな中に軒裏を木にしているところなどは、イタリアの高級紳士服の裏生地を彷彿とします。奇抜さを狙わずに、削ぎ落とされた正統派のデザインが最優秀賞を獲りました。このコンテストもいよいよ熟してきたという感じを強く受ける作品です。

●杉田特別審査委員のコメント

高低差のある敷地に合わせ、地下階に2台分の駐車場を設け、その上に切妻屋根の平屋を乗せた住宅ですね。庭側にバルコニーを大きくとった1階にブラックの金属サイディングを用いています。建物の形はたいへんシンプルで、大きな切妻屋根とその下の1階外壁の黒、三角形の妻壁と地階の白、また、その中に軒裏に見える垂木や野地板、バルコニーを支える柱と手すり壁の木材がアクセントになって心地よく目に映ります。今回の施工例コンテストの新築部門は、力作が多く、甲乙つけがたいところがありましたが、その中で最も多くの票を集めた作品でした。バランスがよく、安定感を与える作品であると思います。

金属サイディング施工例写真コンテストは、日本金属サイディング工業会加盟8社が、全国の設計事務所・工務店・金物店・板金店の協力を得て、金属サイディング普及活動の事業として実施しているもので、第 14 回は全国から 2,346 作品の応募がありました。新築及びリフォームで建物の外装に金属サイディングを使用したものを対象とし、新築では建物の意匠性・高級感・コーディネート感覚など、トータルでバランスのとれた作品、リフォームでは『施工前⇒施工後』で優れたイメージアップの見られる作品を審査委員会で選考しました。その結果、最優秀賞 2 作品（新築・リフォーム各 1 作品）、優秀賞 8 作品（新築 4 作品・リフォーム 4 作品）、入選賞 40 作品（新築 22 作品・リフォーム 18 作品）が選ばれました。
また、今回も昨年に続き（震災発生以来 5 回目）応募作品件数に応じた義援金 234,600 円を東日本大震災被災の被災者支援のために日本赤十字社を通じ寄付いたしました。

［審査委員会］
・特別審査委員　江口惠津子（株式会社ヴェルディシモ代表取締役、日本フリーランスインテリアコーディネーター協会会長）
・特別審査委員　杉田宣生（一級建築事務所 HARUハル建築研究所）
・当会審査委員（理事・幹事・技術委員・事務局）

リフォーム部門 最優秀賞

株式会社総建装（北海道）

アパート兼事務所としていた建物をもう他人には貸さないという事で専用住宅に改修いたしました。
元がアパートなので、横方向に長い建物でした。
屋根と外部の廊下を一部撤去し、ひとつの長い建物ではなく2つの建物がくっついて長くなって見える様に変更しました。
ベースはホワイトのシンプルな外壁としましたが、3種類の外壁を使用し、間延びしないよう横張り&縦張りでアクセントもつけました。
また、残した外部廊下のスチールフェンスにも板を張り、駐車場だった部分の敷地も半クローズタイプとし、同じ仕様の板でフェンスも作成したので建物とエクステリアの一体感も出すことが出来ました。

（株）総建装 社長

●江口特別審査委員のコメント

大変な変わりようです。これこそ金属サイディングの魅力満載。もともとのアパートはかなり年季がいっており、北海道であれば断熱改修は必須だったでしょう。アパートから住宅へ用途替えになりますが、金属サイディングを活かしてうまく変身されました。横長のアパートですので、ベランダは一部にして玄関エントランスを縦に大きくとったのが良かったと思います。断熱性、そしてデザインに優れた金属サイディングが大きなFIXガラスによく生えています。窓サッシュを含めた、デザイン力あるリフォームの作品となりました。これからのリフォーム物件の新しい可能性を提示して頂きました。

●杉田特別審査委員のコメント

アパートをリフォームして、専用住宅としたようですね。外階段と外廊下の一部を撤去し、残した外廊下をバルコニーとして生かしていますが、デザイン的な違和感はまったくありません。工事としては、間取りの変更や開口部サッシの取り替え等と、かなり大規模なものであったことがうかがえます。もとがアパートですから建物は大きいですが、いかにもアパートといった印象でした。リフォーム後は、大きな外壁面に対してサッシの形状や大きさを工夫して変化を与えるとともに、シンプルな金属サイディングでアクセントを持たせた良い作品であると思います。

新築部門 **優秀賞**

㈱イケダ工務店（栃木県）

新築部門 **優秀賞**

㈱福見建築設計事務所
（富山県）

新築部門 **優秀賞**

㈱ルポハウス（滋賀県）

新築部門 **優秀賞**

㈱大倉 岡山支店
（岡山県）

リフォーム部門 **優秀賞**

㈱FCハウジング（北海道）

リフォーム部門 **優秀賞**

山崎板金工業所（新潟県）

リフォーム部門 **優秀賞**

㈱プラネットリビング（滋賀県）

リフォーム部門 **優秀賞**

リファインまつやま城北（愛媛県）

第68回 全国建築板金業者 京都大会

大会本番で桜木太夫の演奏が披露された

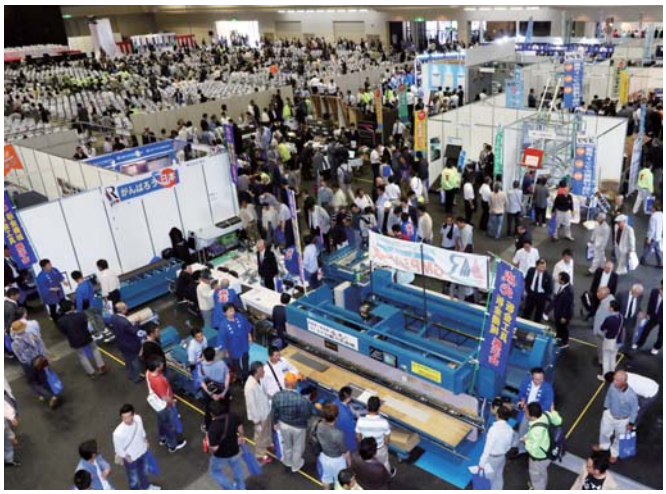
〈主催〉
全日本板金工業組合連合会
一般社団法人 日本建築板金協会

〈開催日〉
平成28年5月18日（水）前夜祭
平成28年5月19日（木）本大会
於：京都府総合見本市会館 京都パルスプラザ

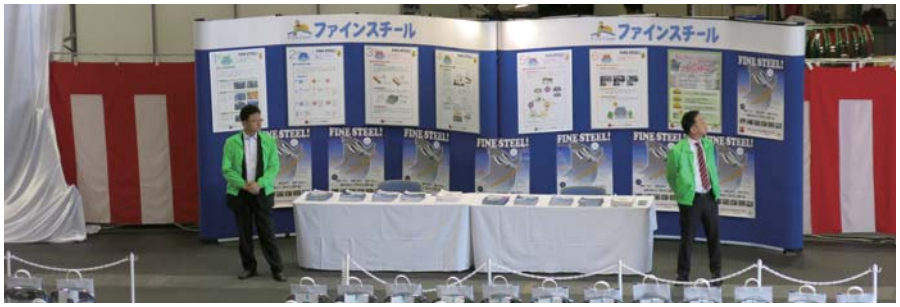
写真右上が流通協展示ブース　会場内最前列のベストポジションで、ポスター展示と記念品を配布

テープカット

第68回全国建築板金業者京都大会が、平成28年5月19日に京都市伏見区の京都パルスプラザで開催された。大会および前夜祭では、京都・島原の太夫道中や演舞、演奏、芸子・舞妓の演舞等が披露され、京都らしい「おもてなし」に溢れた大会となった。


各展示ブース風景

全国の建築板金業者約3,500名が京都府に集結。
第68回の総合テーマは
「半世紀の歴史を礎に、輝く未来を切り拓く!」
― 全板連創立50周年 ―
建築板金業界では施工品質のさらなる向上･確保のための登録基幹技能者や責任施工保証の諸制度、「匠の技」を未来に継承するための建築板金競技大会などを推進し、国が掲げる「一億総活躍」と「地方創生」の施策にも大きく貢献している。本年は全板連が創立50周年を迎える。この機会を、高く評価されてきた組織力をさらに向上させる大きな節目と捉え、「一億総活躍･元年」と足並みを揃えるかたちで明るい未来を自らの力で切り拓いて参りたい。



流通協展示ブース

京都パルスプラザ外観

桜木太夫の道中

舞妓による演舞

京都ホテルオークラで行われた前夜祭は、挨拶に先立ち、太夫や芸子･舞妓による演舞などが披露され、石本惣治大会会長（全日本板金工業組合連合会理事長）の挨拶、石破茂衆議院議員、伊吹文明衆議院議員、山田啓二京都府知事、門川大作京都市長、中尾卓日新製鋼建材社長の来賓祝辞、森谷英之日本鐵板社長の乾杯にて開催された。

石本惣治 大会会長

石破茂 衆議院議員

伊吹文明 衆議院議員

山田啓二 京都府知事

門川大作 京都市長

中尾卓 日新製鋼建材社長

森谷英之 日本鐵板社長

ファインスチールを使った
建築設計例 318

ペッタンコハウス

地域・風景になじむ、愛でられる建築

設計：田辺 雄之／田辺雄之建築設計事務所

（撮影：写真はすべて、田辺雄之氏撮影©）

ギャラリー兼住宅

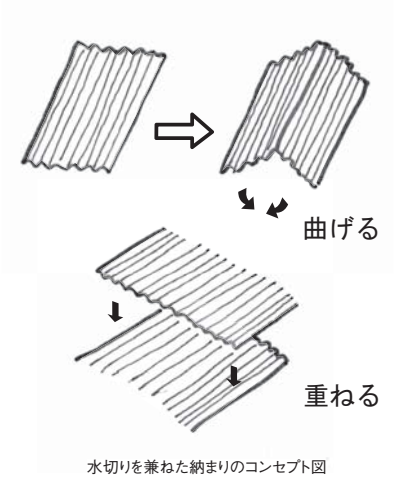
「ペッタンコハウス」は長野県松本市に建つ、屋根に塗装ガルバリウム鋼板 小波板を用いた、約100㎡の2階建ての木造住宅である。南面が川に面しており、東面を除いた3方向に開かれているこの住宅には夫婦＋子供の3人が暮らしている。施主は設計者である田辺氏の幼稚園時代からの友人であり、田辺氏が以前設計した塗装ガルバリウム鋼板小波板を屋根と外壁に用いた住宅「アルマジロ」を見て依頼したという。施主は江戸指物師4代目の工芸家であるため、1階の南側を制作物のギャラリーとしても利用できるよう計画されている。

一体感のある内部空間

この住宅の大きな特徴は一体感のある内部空間である。南側にあるギャラリー兼居間スペースから、北側にある個室にかけて、徐々にパブリックゾーンからプライベートゾーンへと変化していく平面構成となっているが、その中で扉を用いているのは玄関と水周りのわずか2箇所のみ。また、2階を挟んで吹き抜けが設けられていること、2階の床が一部ルーバーになっていることで、より空間の一体感を高めている。

ワンルームのようなこの建築の断面形態は、室内環境のコントロールにも役立っている。夏はドーマーの窓を開けることで、川から流れてきた空気が抜けていく。施主の要望として挙げられていた薪ストーブも、床下収納や欄間の効果も相まって建物全体を暖め、冬は半袖で過ごせるほどである。

屋根（ドーマー）周りの近景。塗装ガルバリウム鋼板小波板を波に沿って折り曲げ重ねるシンプルな納まり。



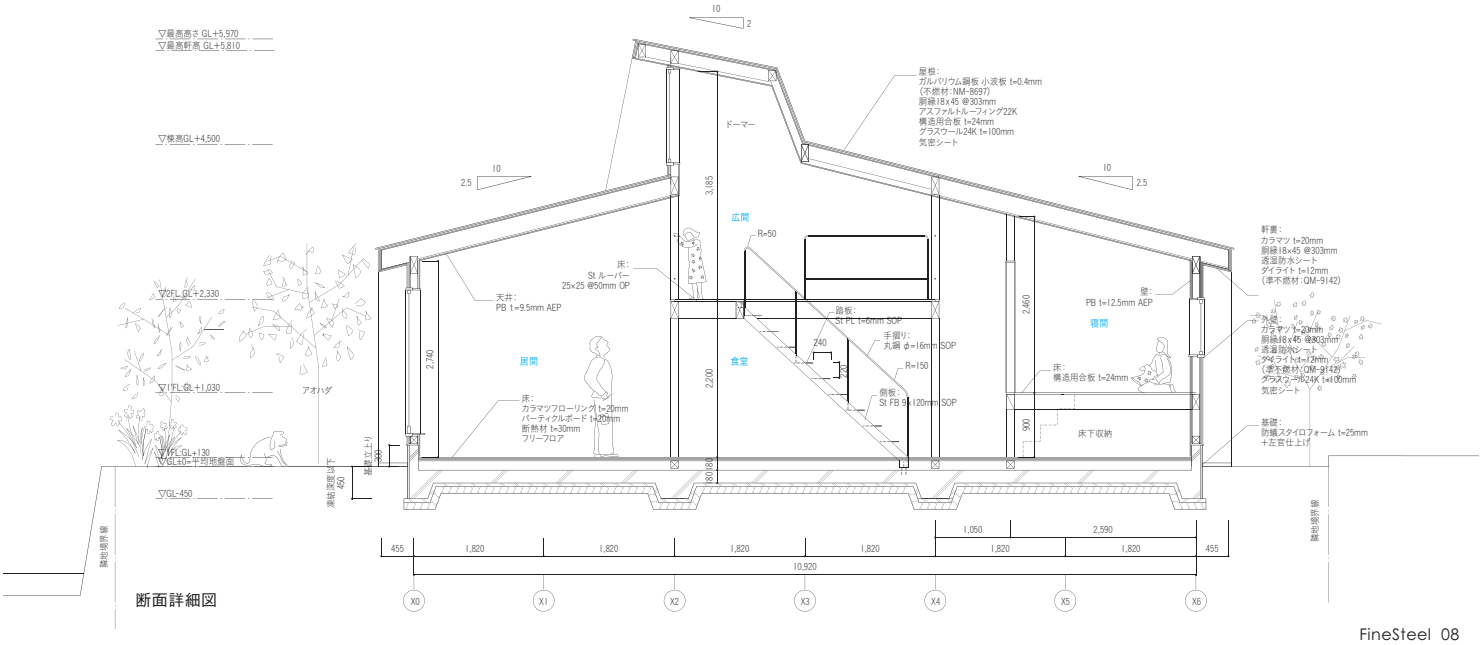
水切りを兼ねた納まりのコンセプト図

この住宅には明確な仕切りはないが、平面的な広さからか、各人が居心地の良い自分の居場所をあちらこちらに見つけることができる。人の気配は感じるが、それでいてプライベート空間のような領域づくりができることを目指したと田辺氏は言う。

施主とのスタディ

建築の形態は主にスタディ模型をつくることによって決定された。

総2階や敷地に対して東西に長い形、南北に長い形、L字型などが検討されたが、周囲とのボリュームの関係性やコストの抑制という観点から、現在の案の元となる平屋案が選ばれた。住宅のコストを下げる方法として、工種を減らすこと、施工者に施工しやすいと思わせることが挙げられる。そこで、この住宅では4間×6間という彼らが使い



断面詳細図

リビングより食堂・二階を見る。

慣れた平面形プラス平屋のような建物の高さ等で、ローコスト化が図られた。

「ペッタンコハウス」というネーミングは5歳になる施主の娘さんが付けた。スタディ模型のなかでも平屋に近かった今回の案を「ぺっしゃんこなやつ」と表現したのがきっかけだそうだ。建築にこのようなネーミングを与えることは、建築用語以外で施主と建築について話すことができ、新たな発見や共感を得ることで、よりお互いに楽しんでプロジェクトを進めることができるという。

このプロジェクトは打ち合わせやスタディなどが異例の早さで進んでいったそうである。

というのも建築家と施主は旧知の仲であり、そもそも生活スタイルへの共感やお互いにものづくりに精通していたことから、必要な空間や素材の選び方などがスムーズに決まっていったからである。

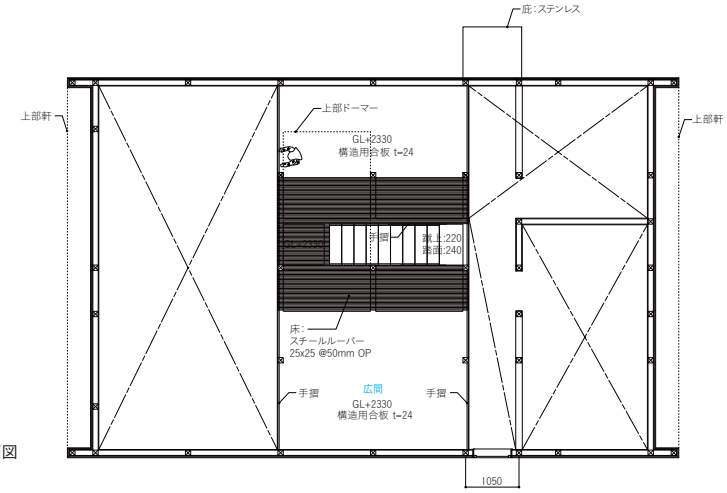
素材へのこだわり

この建築にはいくつかの素材が用いられているが、その中でも最も特筆すべきは構造材、外壁材、床材と様々な場所に用いられているカラマツであろう。地元信州の木の利用を広める「ソマミチプロジェクト」に施主が深く関係していることもあり、工房のある慣れ親しんだ山で採れたカラマツを地産地消として用いることとなった。厳しい環境で育つカラマツは強度を得るために捻れながら成長をすることから、無垢材での使用は難しいとされてきた。しかし、製材業者の乾燥技術が向上したことなども伴い、今回は無垢材のまま利用されている。また、今まで利用されていなかった芯近くの幅の狭い材を外壁とすることで廃材を減らし、歩留まりをあげるという工夫もされている。「ペッタンコハウス」は平屋に近い構成となっているため、通し柱や、梁などの寸法を通常の規格寸法である4m以内にすることでも、ローコスト化が図られている。1階の床レベルが基礎の立ち上がりから300mmほど下がっているのも、4mの規格材を使いながらも二層分の天井高を確保しようとした意図からである。

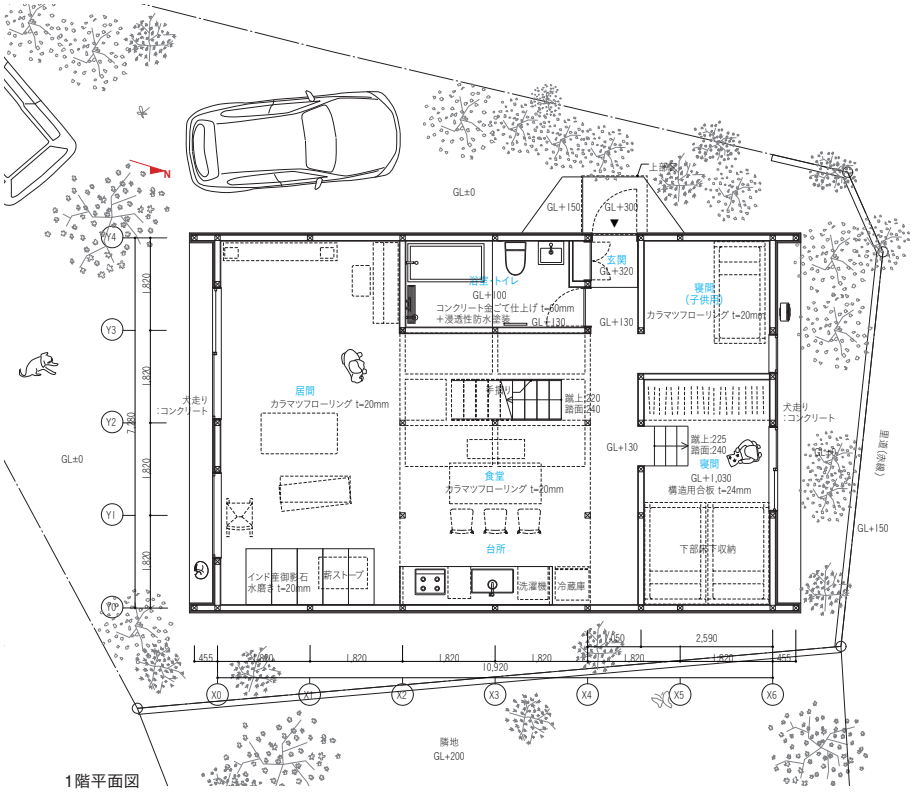
カラマツが印象深い屋内空間の中で、2階の床のルーバーや階段などにスチールが用いられている。スチールを用いたことにより梁せいが抑えられ、光の通りみちが増えたことで1階をより明るい空間にしている。

屋根に使用した塗装ガルバリウム鋼板 小波板は尾根に沿って折り曲げられるという特性がある。通常の納まりでは出隅などに役物が必要になるが、折り曲げることで役物を必要とせず、シンプルで合理的な納まりが可能となる。また材自体が薄く、重ねても厚みがそれほど出ないことから、例えば窓周りに関しても役物を先にして、その上から

中央階段より食堂・台所・居間を見る。



2階平面図



1階平面図

塗装ガルバリウム鋼板 小波板を被せることで役物が表に出ない納まりも可能である。

外壁にはその屋根の色に合わせて、カラマツの外壁材に木の表情が見える程度に白い塗装が薄く施工されている。時がたつに連れて木が変色し、質感の差が出てくるようなイメージであるとのこと。

周囲に愛でられる建築

建築家は周りからも見られる造形物を作る仕事である。そのため、それ自体が美しくなければならないと田辺氏は考える。昔の寺院などに代表されるように、周囲に愛される建築というのは、たとえ設備的にはサスティナブルでなくても周囲によって残されるべきモノへと昇華されてきた。「ペッタンコハウス」も切妻屋根や圧迫感のないヴォリュームなど、周囲に理解されやすい建築的ボキャブラリーを持ちつつも何かその町に新しいものを挿入するかのようなイメージで設計された。実際に周囲からの評判も良く、写真撮影中に周辺の住民から「このような建物ができて嬉しい」と声をかけられたこともあったそうだ。

この建物の外構は今後整備されていく予定だ。庭には木が植えられ始め、クライアント自作の車止めや薪置きなどが作られている。外構が整備されることで、より地域とその風景になじむ建築となっていくであろう。

訂正とお詫び

本誌2016年春号『ファインスチールを使った建築設計例』のP8「断面詳細図」において、ガルバリウム鋼板使用箇所の表記を「**ガルバニウム鋼板**」と間違って記載いたしました。深くお詫びして訂正させていただきます。

設計：田辺雄之建築設計事務所／田辺 雄之

田辺雄之建築設計事務所／〒248-0012 神奈川県鎌倉市御成町6-15

[tel]0467-67-5810　[fax]0467-67-0160　[e-mail]info@yuji-tanabe.com　[URL]http://www.yuji-tanabe.com

レポーター：東京大学 大月研究室　筒井 健介(M1)　武田 秀星(M1)

建築めぐり

ウォートルス伝 5

ウォートルスの現存作品

藤森研究室

担当 丸山 雅子（もとこ）

本連載の主人公ウォートルスは、「日本近代建築史上最初のスーパースター」として高く評される人物だが、哀しいかな、一般的には無名である。

日本で活躍した外国人建築家について考えると、最重要人物として一番に名前が挙がるのは、「日本近代建築の父」ジョサイア・コンドルで間違いないだろう（1877来日-1920没）。彼の指導によって最初の日本人建築家が育ち、彼らが日本の建築界を築いた。作品もいくつか現存し、その多くは文化財として大事に庇護されている。

次にアントニン・レーモンドを挙げる人はかなりの建築通だ（1919来日-37離日、48再来日-73離日）。「日本のモダニズム建築の父」と称されることもあるが、父より兄と呼んだ方が私にはしっくりくる。モダニズム建築の先駆者で、事務所から優秀な建築家を輩出した。作品も結構残っている。

あるいはレーモンドより、「近代建築の巨匠」フランク・ロイド・ライトを先に挙げる人がいるかもしれない。日本での活動期間は短いが（1905初来日、1915-1922本格的に活動）、熱心な弟子達と、多くの崇拝者を残した。本人が日本で手掛けた作品は少ないが、抜群の知名度を誇る「旧帝国ホテル」がある。

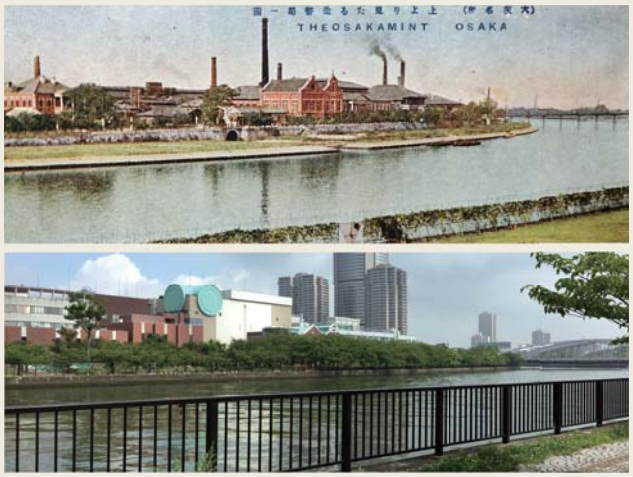


図1 大川の対岸から見た造幣局、百年前（上）と現代（下）
上は大正時代に作られた絵葉書の一部より。中央に見える煉瓦建築は1911年に竣工した発電所で、その右にウォートルスの金銀貨幣鋳造場（1927年取り壊し）と本庁舎が写っている。下は同じ範囲を今年撮影したもの。旧発電所は構内に現存する唯一の煉瓦建築で、1969年に造幣博物館として再生された。その右の白い大きな建物は現庁舎で、ウォートルスの建物を取り壊した跡地に1929年竣工した。

だが一般的には、レーモンドやライトより、ウィリアム・メレル・ヴォーリズの方が有名かもしれない（1905来日-64没）。元々建築家ではなかったが、来日後に建築に携わるようになり、結果的には1500件を超す作品を手掛けた。現存作品も多い。

要するに、教え子や弟子や崇拝者がいて、その者達が建築界で活躍していることと、それ以上に一般的には、作品が多く残っていることが、建築家が後世まで忘れられないための必要条件だと考えられる。

だがウォートルスの場合、両方とも欠けている。ウォートルスの指導を受けた日本の職人や技師は、間違いなく大勢いたはずだが、その後建築界で名をあげた人がいない。そして作品のほとんどが失われている。

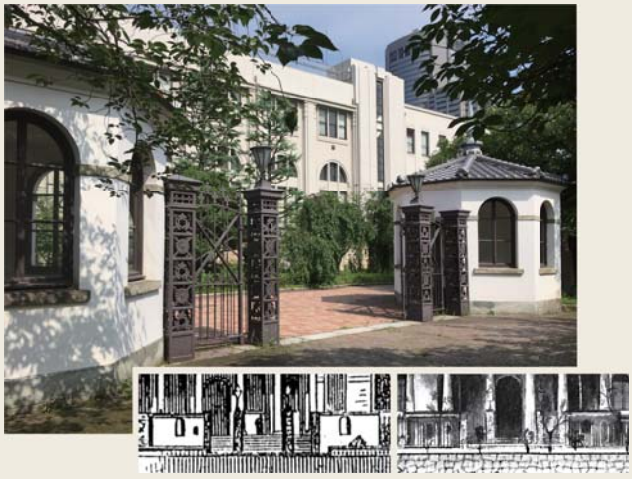


図2 旧造幣寮正門建物（国史跡）
かつて正門は、旧金銀貨幣鋳造場の正面にあったが、現在は正門の位置が変わり、旧正門建物は、鉄製門扉、門柱とともに敷地内に保存されている。八角形平面、アーチ形の窓を持つ小さな建物で、衛兵の詰所として使われた。

ウォートルスの稀少な現存作品は大阪にある。いや、大阪にしかない、と言うべきか。それは前回取り上げた大阪の造幣局に関係している（注）（図1）。

話をおさらいすると、ウォートルスは薩摩藩に雇われ1865年来日した。薩摩藩の技師長として奄美大島と鹿児島で働いた後、1868年長崎に、秋には大阪に移り、明治政府から造幣局の建設を一任された。造幣局の主な建物は二年でほぼ竣工し、1870年10月にウォートルスの手を離れた。造幣局は翌1871年4月に開業した。

まず、旧正門建物がウォートルスによるものだと伝わる（図2）。旧正門は旧金銀貨幣鋳造場の正面に位置し、鉄製門扉と門柱の両脇に、衛兵の詰所として建てられた。八角形平面の、アーチ形の窓を持ち、宝形屋根を載せた小さな建物である。ただし前回紹介した、竣工時の写真に基づく版画や、1874年に描かれた図と比べると、姿が少し異なる。版画ではアーチ形の窓がはっきり確認できるし（図2下左）、図からは八角形平面らしい様子もうかがえるが（下右）、どちらにも現在のような宝形屋根は描かれていない。屋根はおそらく後の改築だろう。

造幣局の工場の遺構としては、旧金銀貨幣鋳造場の玄関部分のみが残っている（図3）。一見大きな建物が残されているようだが、肝心のオリジナル部分は、間口15.2m、奥行きわずか2.9mである。

旧金銀貨幣鋳造場は造幣局の中心となる建物で、1871年後半と1886年に屋根が改造された以外に大きな変更はなく、半世紀以上使用されたが、1923年の関東大震災を機に耐震性が問われ、建て替えられることになった。1927年4月に解体が始まると、建物を惜しむ声があがり、造幣局関係者の努力で、正面玄関のペディメント（三角破風）とそれを支える6本のトスカナ式円柱、その奥の外壁の石材が、番号を付けて保存された。ほどなく明治天皇聖徳記念館の玄関に再利用されることとなり、1935年移設復元された。明治天皇聖徳記念館は戦後桜宮（さくらのみや）公会堂になり、現在は大阪市から民間に貸し出され、結婚式場兼レストランとして活用されている。

現存する洋風工場建築の遺構としては、鹿児島の旧集成館機械工場（1865）に次いで古い。建物は香港造幣局（1866年）を手本にしたとされるが、それは平面計画だけのようである。現存する香港造幣局の立面図には、急勾配の大屋根と、中央に尖塔を高くそびえさせたゴシック風建築が描かれている。ウォートルスは来日前香港に逗留していたが、香港造幣局はまだ工事の序盤で、完成までは見ていない。それに仮にあの立面図を見ていたとしても、本来建築家ではないウォートルスにゴシックは無理だったのかもしれないし、そこまで真似る必要はないという判断があったのかもしれない。ウォートルスは、香港造幣局の平面を参考に、自分にできるデザインで建物を立ち上げたのだろう。

図3 旧造幣寮金銀貨幣鋳造場正面玄関（国重文）
造幣局の中心となる建物で、半世紀以上使われたが、耐震性が問題視され、1927年に取り壊された。その際、正面玄関部分だけ石材が保存され、1935年明治天皇聖徳記念館の玄関として移設復元された。現在は結婚式場兼レストランとして活用されている。

こうして完成した建物は、「It can hardly be surpassed in workmanship by any building in the East. Such is the opinion of all who have seen it.（出来ばえにおいて、これに勝る建物は東洋にはほとんどない。それが見た人すべての意見である）」との評判であった（文献1）。

そして泉布観がある（図4）。泉布とは貨幣を、観は館を意味する。造幣局の応接所として建てられ、天皇や皇族、外国賓客の滞在にしばしば供された。煉瓦造二階建てで、三方に二層のヴェランダをめぐらす。ヴェランダを支える円柱は花崗岩製で、やはりトスカナ式である。竣工時には上部にパラペットが立ち上がり、屋根はその中に納まっていたが、明治中期にパラペットは撤去され、現在のような屋根に変更された。同時に玄関ポーチも半間分手前に出された。内装も、より豪華に変更された。現在の姿は改修後のものである。

その他、ウォートルス設計の可能性が指摘されているものに、長崎の旧オルト邸（1865）と旧リンガー邸（1868）（文献2）、鹿児島紡績所技師館（1867）（文献3）があるが、確かな証拠はない。

図4 泉布観（国重文）
泉布は貨幣を、観は館を意味する。造幣局の応接所として建てられ、天皇や皇族、外国賓客の滞在に利用された。明治時代に改修された姿で保存されている。

実は日本近代建築史において、ウォートルスは高く評価されると同時に逆の評価も得ている。それは彼の資質に関するもので、彼のデザイン的な未熟さを指摘して、「本格的建築様式の教育を受けていないがゆえの限界」（文献4）であり、所詮は技師であって建築家にはなれなかったというのである。このようにウォートルスについては、＋（プラス）と－（マイナス）の評価がセットで語られることが多い。

だが本当にそうだろうか。旧金銀貨幣鋳造場が玄関部分だけでも残ったのは、作品にそれだけの力があったからで、彼に建築家としての素質があったからではないのか。「これに勝る建物は東洋にはほとんどない」と言わせた人物が、建築家のレベルにないのなら、当時東洋にいたはずの建築家達は何をしていたのか。日本の建築史家は彼に対して厳しすぎやしないか。彼にその気さえあれば、もしヴォーリズほど長く続けていれば、日本で建築家として大成したのではないだろうか。

改変されても一部であっても、ウォートルスの作品が現存することに感謝したい。そうでなければ、今以上に人に知られず歴史に埋もれた存在になっていただろう。

［注］
着工時には「貨幣司」であったが、その後何度も改組され、ウォートルスが正式に政府と雇用契約を結んだときには「造幣局」に、竣工時には「造幣寮」に、そして1877年に再び「造幣局」に名称が戻り、現在に至る。本文では「造幣局」に統一した。

［参考文献］紙面の都合で簡単に記す
1 『The Illustrated London News』1871年5月17日付け
2 藤森照信『日本の近代建築（上）』1993年
3 堀勇良『外国人建築家の系譜』2003年
4 村松貞次郎・藤森照信『明治の洋風建築』1974年

街でみかける ファインスチールの施工例 その27

1 つくばエクスプレス 流山おおたかの森駅

千葉県流山市西初石にある「流山おおたかの森駅」は、東武線との乗換駅で当駅からみて西方にある森林「市野谷の森」に、絶滅危惧種にかつて指定されていたオオタカが生息することから、駅名の一部に採用された。プラットホームや線路内にオオタカが迷い込んできたこともある。
当駅は、塗装ガルバリウム鋼板が採用された長い屋根のかかった、2面4線の島式ホームを有する高架駅で、北側から1番線（下り副本線）・2番線（下り本線）・3番線（上り本線）・4番線（上り副本線）となっており、快速列車と普通列車の接続が実施される。なお、普通・区間快速・通勤快速・快速のすべてが停車する。
また、商業施設「TXグランドアベニューおおたかの森」が併設されており、便利なのはもちろんのこと、こだわりの味を提供する飲食店や日々の暮らしをサポートしてくれるショップが充実している。

2 川上総合センター
やまぶきホール

深い緑に包まれた吉野川源流の地、奈良県吉野郡川上村宮の平にある「やまぶきホール」は、村を流れる清らかな吉野川の水面を流れる一枚の「やまぶき（村の花）の葉」をモチーフにした、塗装ガルバリウム鋼板の大屋根が特徴の総合施設型ホールである。
343席のホールには、演奏から演劇、寄席、パフォーマンスまで多彩な演目に対応できる音響・照明・舞台装置を完備。また、舞台背面の音響反射板が上がると滝が表れるなど、アーティスティックな空間演出も特長の一つである。
ホール緞帳、エントランス、屋外広場には「匠の聚」7名のアーティストの美術作品を展示。ギャラリーや調理実習室、お風呂、村立図書館などもあり、元気になれるいくつもの空間が用意されている。
だれもが一流のエンターテイメントを楽しめる本格的な舞台設備、健康や趣味・勉強・仕事のためなど多目的に使えるさまざまな空間、そしてバリアフリー設計の誰にでもやさしいホールとして活用されている。

FINE STEEL!

全国ファインスチール流通協議会
ファインスチールイメージキャラクター
ファイン君

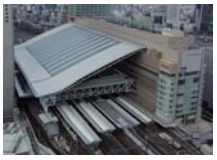
ボクらは「自在に変化」進化した鉄！

ファインスチールは、鉄の長所を最大限に活かしながら、これからの家と暮らしにふさわしい特長を合わせ持つ、現代建築の最適な素材として注目を集めています。新しい住まいで始まる暮らしをより良いものに。
ファインスチールが理想のカタチを実現します。

ボクらの特長

地震につよい　表面がきれい　環境にやさしい

屋根材・壁材には ファインスチール



FINE STEEL

全国ファインスチール流通協議会
http://www.zenkoku-fs.com

Fine Steel

ファインスチール　第六十巻　三号
平成二十八年七月二十五日発行
一、四、七、十月二十五日発行
発行所　一般社団法人 日本鉄鋼連盟　建材薄板技術普及委員会
〒103-0025　東京都中央区日本橋茅場町3-2-10鉄鋼会館
☎03(3669)4815　FAX03(3667)0245